

事後評価報告書

ネパール大震災関連 国際緊急共同研究・調査支援プログラム(J-RAPID)

1. 研究課題名：「大地震がネパールの水安全性に及ぼす影響と復興対策に関する調査・研究」

2. 研究代表者名：

日本側：山梨大学 総合研究部 教授 風間 ふたば

相手側：トリブバン大学 工学部 教授 シャキア ナレンドラ マン

3. 総合評価： A

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

2014年度より SATREPS プロジェクトで進めていた「水安全性を確保する技術の研究」において取得していたデータを基礎とし、今回発生した地震被害を同一地域で緊急に調査したことから、地震前後の水質変化や水需給を比較することが可能となっていた。調査結果は具体的に示されており、水の供給に関する多様性が重要であることを示した点は高く評価できる。また、災害後の水安全の科学的根拠に基づき、水利用に関わる水処理、代替水源等の緊急対応の方策を明らかにした点も重要な成果であると評価できる。このように、緊急時における応急的水処理法の効果の検証は、今後の非常時の水系感染リスクの低減策となることを示した。緊急研究成果は、相手国研究チームと連名の原著論文が2報、学会発表が3件あり、優れた成果として高く評価できる。今回得られた地震時の水利用に関わる研究成果を今後も継続される SATREPS プロジェクトに反映し、災害対応をも考慮したシステム研究・開発に発展することが期待される。

終了にあたって、日本側研究者の渡航規制や相手国研究者の被災対応などの混乱により地震直後に調査できなかった項目、そのために得ることのできなかった成果についての整理をするべきだろう。

(2)交流活動の評価について

地震発生後の被害と社会的・政治的混乱の中、相手国水道事業者(KUKL)との良好な関係から詳細な調査結果が得られたこと、日本側からの調査手法や水質計測の技術指導によってほとんどの作業が相手国研究者でできるようになっていたこと、地形や地理に詳しいネパール側との役割分担が非常に効果的に構築されていたこと、住民側からの生の情報を得ることができたことなどから、現地担当者による調査が活発に進み、優れた研究成果も共同で発表された。この最大の要因は、相手国研究者との協力体制がうまく機能したことであり、交流活動として高く評価できる。

一方、SATREPS プロジェクトと J-RAPID プロジェクトの日本および相手国研究者の研究分担・研究

体制・組織について、報告書で明示し、両プロジェクトの位置付けをより明確にすることも望まれる。

(3)その他

今後の課題として、水質確保の活動に平時を含めてどのような変化をもたらすことができたのか、将来的にできるのかについて、現地の考え方をまとめておくことも必要ではないだろうか。また、先行研究プロジェクトのない地域においては、技術移転や関係性の構築に時間がかかることが想定されるため、同様の研究を他地域で展開することの難しさの度合いについての知見を整理することも望まれる。